
チキン野郎が幻想入り

中二病 番号 20000

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チキン野郎が幻想入り

【Nコード】

N9588U

【作者名】

中二病 番号 20000

【あらすじ】

目が覚めると、俺はひまわり畑で寝転んでいた。

一般人のチキン野郎、どう考えても幻想郷で生き残れそうに無い。必殺技は逃げること！

そんな主人公が、この幻想郷でどうやって生きていくのか！？

『逃げるんだよオ！スモークーッ！！』

「いやだから、スモークキーって誰?!」

十六夜 朔（前書き）

注釈 主人公がもっていた世界は「東方project」が存在しないという点を除いて

僕たちが住んでる世界とまったく同じと考えてください。

ゆえに、主人公は東方のキャラクターたちのことをまったく知りませんし、幻想郷のことも何一つわかりません。ご了承ください。

十六夜 朔

目が覚めると俺はひまわり畑で寝転んでいた。強い日差しがこうこうと照りつける。

なんとなく体がだるいし、なぜか背中が痛い。

立ち上がり服の土を落とすと、一人の少年が俺のほうに近づいてきた。

緑の髪にどう考えても季節はずれなマント、おまけに触角……なんだろうか。

一体なんでこんな格好を……コスプレか？

「だ、大丈夫ですか？」

「大丈夫だ。問題ない。」

俺自身、そこまで身長は高くないがそれでも見下ろせるほど彼は小さい。

……って、ちょっとまで。この触角っぽいのがよく見たら頭からそのまま生えてないか？

人間？……いや、まさか妖怪とか化け物とかそんなんじゃないよな……

だとしたら回れ右してさっさと逃げ出したいぜ。

誰に言うわけでもないが、俺はチキンなんだ。

中に人間が入ってるのが前提のお化け屋敷でさえビビッて入れないレベルのチキンが

本物の妖怪なんかに出くわして恐がらないわけねーだろ、常識的に考えて。

いや、でもなあ……この顔だったらどんなに凄まれても恐くなさそうだしなあ……

「そうですね・・・良かった。びっくりしましたよ貴方がいきなり落っこちてきたんですから。」

「・・・落っこちてきた？」

意味がわからん、俺が落ちてきたこともこいつが人間なのかどうかって事も・・・

というか、俺いままで自分の部屋の布団で寝てたはずなんだけどもう思いっきり理解の範疇を超えてやがる。

「少年。俺にはさっぱり意味がわからないのだが・・・」

「少年って・・・私、女の子ですよ?!」

「・・・え？マジっすか。」

「マジです。」

そういうと彼女はエッヘンと胸を張るが・・・張っても無いに等しいのが哀しい。

しかし、中性的な顔立ちだな、とは思ったが女の子だったのか・・・

「で、どうやって俺は落っこちてきたんだ？」

「はい、私がここを歩いていたら突然貴方が降ってきて・・・そして、そのひまわりをへし折りました。」

彼女が指差す方向に目を向けると、確かにいままで俺が寝ていたと

ころのひまわりは全滅だった。

まあ、当然だよな。上から降ってきたらしいし、まったく「親方！空から男の子が！」なんてシャレにもなんねえよ。

「と、とりあえず、逃げましょう。見つかる前に。」

確かに、弁償させられるのはいやだしな。でも、それにしてはビビりすぎだろ。

大体、ひまわり数本へし折ったくらいでそんなガクガク震えなくてもいいような　　！！！！！！！！

い、い、今の殺気は何だ！？

なんかこう、滝に打たれたみてえに冷や汗が出てきやがる・・・

「　　そのひまわりを折ったのはだあれ？」

ヤバイ。ほんとにヤバイ。何がヤバイって聞かれたって何かとしか言いようがねえ。

でもヤバイ。もう泣きそう。ヤバイ。ヤバイよ。ヤバイって。

表情を固まらせ、俺はおそろおそろ振り向く。

綺麗な女性、でも怖い。

日傘を差して、彼女はニツコリと満面の笑みを浮かべる、でも怖い。俺よりも身長が高くてスタイルも抜群、でも怖い。

白すぎず黒すぎず、健康的な肌の色がより美しさを引き立てている、でも怖い。

その肌の下から得体の知れない恐ろしいものがにじみ出ている、やっぱり怖い。

怖い。怖い。こわい。

「……..しよ、少年。」

「わ、私は少女です……い、一体なんですか？」

「き、君はこういうときのた、対処法を知ってるか？」

「いいえ……知りません……」

彼女は首を左右に振る。

知ってたらどんなに嬉しいことか……

「そうだろうな……だがな、俺はこういうときにもっとも有効な必殺技を持っている……！」

「ほ、本当ですか！」

「ああ！見てろ！」

そして俺は、必殺技の構えを取る。体中の力を抜いて意識を集中する……

今だ……！！

クルッ

ダッッ

「逃げるんだよお！スモーク……！！」

「わ、わ、ちよつとまつて！ていうかスモーカーって誰ー！？」

かれこれ3時間ほど、俺は全力疾走を続けた。

ひまわり畑を抜け、砂利道の小石を蹴り飛ばし、森に入って彼女と
二手に別れ

不運にも俺のほうに来たあの人（？）から歯を食いしばりながら逃
げ回り。

今、湖の畔の大きな紅い屋敷に向かっている。

「ハア・・・ハア・・・！（し、死ぬ！このまま走り続けても死
にそうだし、かといって立ち止まったら絶対に殺される！）」

足元がふらついてくる、のどが渴く、頭も痛い。

少しだけ後ろを振り向く。

彼女は、顔に青筋を立てながら満面の笑みを浮かべ近づいてくる。

息切れどころか汗一滴すらかいてない・・・なんつー体力だ・・・

屋敷の門の前まで走ってきた。門番なんだろうか？赤い髪をした女
の子が昼寝をしている。

躓き、こけながらも俺が屋敷に入った瞬間、

今まで追ってきた女性は興醒めという表情で、もと来た道を帰って
いった。

「いきなりどうしました?！」

昼寝をしていた女の子があわてて俺に近寄る。

女の子特有の甘いにおいに安心した俺は、そのまま気を失った。

目を覚ますと俺はベットで眠っていた。
紅い天井に紅い壁、電気どころか窓すらついてない薄暗い部屋だった。

「お目覚めでしょうか。」

服装でメイドとわかる女の子。歳は・・・俺と同じかちょっと上つてところか？

綺麗な銀髪だな・・・ちょっとさわってみたいな・・・なんて事を考えながら。

彼女の顔をぼーっと見ていた。

そっいえば俺、ここに来てから誰一人として名前を覚えてないな。

「君は・・・」

「申し遅れました。私、メイド長の十六夜咲夜と申します。」

「咲夜さん・・・か。ところで一体ここはどこなんだ？」

「はあ、どこと申しますと、この建物がですか？それともこの世界がですか？」

「両方ともお願いします・・・って、世界？ずいぶん素っ頓狂なことを聞くな。」

「あなたの服装を見る限り、幻想郷の人間には見えませんので。」

は？幻想郷？何それおいしいの？ここは日本だろ、だって現に日本語が通じてるんだし。

世界共通語が日本語になった、なんてニュース聞いたこともねーぜいや、なったら嬉しいけどさ。

でもなあ・・・幻想郷って何県にあるんだ？群馬の山奥か？にしては、訛りがないしな・・・

あーもう、こんがらがってきたぜ。

「つーか、幻想郷って何だよ。この建物の名前は？」

「ここは、紅魔館です。幻想郷については・・・いわば日本から隔離された特殊な村里とでもいいでしょうか。」

特殊な村里・・・ねえ・・・隔離されたって事はどういう意味なんだ？

「ところで、あなたのお名前を伺ってませんでしたわ。」

「ああ、俺の名前は」

あれ？俺の名前って 何だっけ？

というより、どうして俺はこの幻想郷に来たんだっけ？

そうだ、部屋の布団で眠ってたら・・・

俺の家ってどこにあるんだっけ？

思い出せない。

どこに住んでたかも、何をしていたのかも、家族は誰だっ

たのかって事も

おれ自身のことも・・・

「う、うあああああああ！！！！！！！」

「きゃ・・・びっくりした。一体どうなさったのです？いきなり悲鳴を上げて。」

何も思い出せない恐怖に、俺は悲鳴を上げる。

絶望に打ちひしがれている俺を、咲夜さんがなだめる。

「お、落ち着いてください！いったい、何があったのか説明してください！」

そうだった。落ち着け、とにかく今わかっていることをまとめよう。

- 1、俺は男だ。これはさすがにわかる。
- 2、歳は10代後半のはず。あいまいに覚えてるだけだけど。
- 3、身長は測ってないけど・・・165cm程度だと、これもあいまいに覚えている。
- 4、完全に失ったのは思い出だけ。ほかの事はあいまいだけど覚えている。
- 5、俺は普通の人間だ。これだけは確実に覚えている。
- 6、ひまわり畑に落ちた俺は、触角少女と共にひまわり畑から脱出し、

何とか紅魔館に着いて命拾いした。

ざっとこれぐらいか・・・

「やっと落ち着いたわね・・・一体何があったのですか？」

「名前が・・・思い出せないんだ・・・」

「・・・！！」

名前が思い出せないという俺に対し咲夜さんは目を見張る。
そりゃそうだ。名前が思い出せないなんて聞いたら俺だってびっく
りする。

「・・・かしこまりました。では、お嬢様が呼んでいますのでまず
そちらに

あなたのお名前は後でじっくり思い出してください。」

「・・・ああ。」

部屋と同じように紅く薄暗い廊下を歩く。

その間、俺たちは何も喋らなかつた。

ふと、目線をあげると・・・そこには大きな扉が待っていた。

咲夜さんが鍵を開けて、扉を押す。

「さあ、お入りください。」

豪華絢爛・・・とまではいかないが、豪華な装飾品に囲まれて、幼
い女の子がちょこんと座っていた。

「わたしが、紅魔館の主。レミリア＝スカーレットよ。」

10歳程度の小さな女の子に情けなくも俺は圧倒されていた。

我ながらあまりにも情けない、ここまで俺はチキンだったか・・・

「見てたわよ。さっきの逃走劇。ただの人間のあなたが風見幽香か
ら逃げ切るなんて。」

「たいしたものだわ、もっとも彼女もかなり手を抜いていたでしょ
うけど。」

かざみ・・・ゆうか・・・？

「あなたがさつきまでリアル鬼ごっこをしていた相手よ。
久しぶりに退屈が紛れたわ、その点については感謝するわね。」

レミリアはその歳に似合わない妖艶な笑みを浮かべる。
彼女の吸い込まれそうな紅い瞳に、俺は魅了されかけた。

「ところで、あなた名前は？」

その問いに咲夜さんが困った顔をする。

「お嬢様、彼は・・・。」

「じつは、俺は名前が・・・いや、その他もろもろ思い出せねえんだ。」

「・・・ふーん。」

そういつて、レミリアは座っていた椅子から降りて俺の前に立った。

「じゃあ、わたしが決めてあげるわ。」

名前を決めるって・・・そんな簡単に人の名前なんて決めていいのか？

「安心しなさい。ふざけた名前は付けないから。咲夜だって私がつけた名前よ?。」

なるほど・・・咲夜さんの名付け親・・・って歳には見えないけど・・・ちよつと安心したな・・・

しかし、十歳ぐらいの女の子に名前を決められるのって結構きついものがあるな・・・

「そうね・・・十六夜 朔なんてどうかしら。いいわ、これでいいわ。これで決まりね。」

十六夜 朔・・・か、まあふざけた名前じゃなかった分幸運だと考えておこう。

それもふざけた名前だろ、なんていわれたら反論できないけど。

「それと、あなた。どうせ帰る場所も無いんでしょ？わたし、あなたのタフさを気に入ったわ。」

そして、レミリアは俺と視線を合わせる。

紅い瞳がしっかりと俺を見据える。

「ねえ、
紅魔館で働くってのはいいかがかしら？」

十六夜 朔（後書き）

今回は、初めて幻想入りというか、東方の2次創作をかきました。こういっては何ですが・・・僕は書くとしたら、最強主人公よりはむしろ一般人、ちょうどいい感じのチキン野郎のほうが好感持てますね。

無論、最強主人公も好きですよ？アーカードとかダンテとか承太郎とかetc

でもね、なんとなくオリキャラ書いているとき拒否感を示すんですよね・・・ちよっと強いとかそんなレベルじゃなくてまさに最強って奴は・・・自分としては、こう・・・弱い奴が頭使って勝つ展開とか最高ですね！

「お前、初めのオリキャラ時止めてんじゃねえか」「オリジナル小説の主人公かなり強いだろうが」

なんて声が聞こえてきそうですが・・・そんな事言われたら何もいえません（笑）

では、次の創作意欲が沸く頃にノシ

博麗神社へ

翌朝・・・

「起きなさい。」

とても寝心地のいいベットで寝息を立てていた俺は、
咲夜さんの毅然とした声で目が覚めた。

「とりあえず持っておきなさい」と言われて渡された懐中時計を
確認すると

まだ午前4時、もうちょっと寝かせてくれよ・・・

「変なこと言わないで、あなたは昨日付けでお嬢様の従者になっ
たんだから。」

そつだ。今の俺は紅魔館のメイド長補佐、要は咲夜さん直属の部
下だ。

よつて、昨日まで・・・というか、お嬢に名前と階級をもらった直
後から

敬語ではなくなった。

その代わりとっては何だが、何人かのメイド妖精をこき使えるよ
うになった。

わかってると思うが、お嬢というのはレミリアのことだ。

「了解しました。・・・で、俺は一体何を？」

俺の質問に咲夜さんは凜とした面構えで命令を告げる。

「まずは、私が朝食の準備をするからその下準備をして、理解した？」

私が美鈴を起こしてくるからそれまでに頼むわよ。

それと下準備が終わったら、次は中庭の花に水を撒くこと。

それが終わったら玄関及び食堂の掃除をして。

これを6時までにはやりなさい。」

「・・・了解しました。咲夜さん。」

とは言ったものの、ぶっちゃけ無理だろ・・・

少年業務中・・・

2時間後

「お・・・終わったー・・・」

何とかして馬鹿でかい机を拭き終わった俺は、全身の骨をコキコキ言わせながら伸びをする。

キッチンのほうに目をやると咲夜さんがテキパキと料理を作っている。

何か手伝いましょうかと、聞くとメイド妖精たちを起こせと命じられた。

男子禁制でもないのになぜか唯一の男子がメイド妖精たちの部屋に入った瞬間、不審者扱いで顔に引っかけ傷を作る羽目になった。

まったく、昨日紹介されたばっかじゃねえか・・・いや、だからこそか・・・

食堂の椅子に座りそんな事を考えていると、キッチンから咲夜さんが顔を出す。

「料理が出来たわ。メイド妖精達は私が呼んでくるから、あなたは

上級従者用のダイニングに来ること。理解した？」

「了解しました。咲夜さん。」

顔に傷薬を塗りながら返事をすると、咲夜さんが付け足すように言った。

「ところで、朔さく。何か記憶は思い出せたの？」

「……いいえ。」

「そう……」

彼女は目を伏せながらそう言うと、そそくさとメイドたちの部屋に向かい、俺は上級従者用ダイニングとやらに向かった。

少年移動中……

ダイニングには俺と咲夜さんと3人の上級メイド妖精（とはいっても姿かたちはなんら変わらない。）が席に着いた。

一通りの食事と片付けを済ませると、咲夜さんが今日の予定について説明する。

説明のときだけ、やけに似合うふち無し眼鏡をつけているが、どうやら伊達眼鏡らしい。

「……じゃあ何でつけてんの？まあ、可愛いけどさ。」

「私と朔は午前11時から15時にかけて博麗神社に向かうわ。」

昼食はあなたたちだけでしょうから適当にキッチンにあるものを使いなさい。」

「……はーい」

上級メイド3人組の心地よい返事と共に、今日の説明会は幕を閉じた。

上級メイドたちがダイニングから出た後、咲夜さんが俺のところに来る。

「ところであなた……空を飛べるの？」

「……タケコプターがあれば可能です。」

「……たけこぶたー？」

「あ、いいです。わからなければいいです。」

どら もんを知らないというカルチャーショックとギャグが思いつきり滑ったことに対する

恥ずかしさをこらえながら、俺は咲夜さんに向き直る。

「……てことは、咲夜さんは飛べるんですか？」

俺の質問に咲夜さんはさも当然というようにうなずく。

「しょうがないわね。さすがにここから走らせるわけにもいかないし……」

わかったわ。先に洗濯を済ませるところだったけど、それはメイドに頼むとして。

今から出発するわよ。もうアポはとってあるしちょっと早めに歩けば何とか着くわね……理解した？」

「了解しました。咲夜さん」

「理解した？」 「了解しました」のやり取りは昨日の夜咲夜さんと決めたことだった。

言うには、こういうことを決めておくとか何かと便利らしい。

二人で玄関に向かった俺と咲夜さんは、外出用の靴に履き替え。

(俺はここに来たときの靴だが……)

早速居眠りしていた……えっと……メ……メリーさん……で合つてたっけ？

いいや、なんか違うな……あー……そうだ！美鈴さんだ！

「美鈴みりんじゃなくて美鈴めいりんよ。」

……これは失礼。とにかく寝ていた美鈴めいりんさんを咲夜さんが蹴っ飛ばし、俺たちは門を後にした。

少年少女移動中……

神社に続く長い階段を上り終わると、そこには脇を強調した巫女服をなめてるとしか言いようが無い巫女服(?)を着た少女が箒片手に突っ立っていた。

「意外と早かったじゃない。予定より1時間ほど早いわよ。」

「朔の足が速かったおかげね。」

涼しい顔で話を進める咲夜さんの横で俺は肩で息をしていた。

実は、ここに来る最中かなり大型の妖怪に出くわし全力で逃げてき

たというわけだ。

けっして、長い階段が辛かったということではない・・・いや、本
当だからな？

「サク？・・・って、そこではてる執事まがいのかつこうした奴
？」

巫女まがいのかつこうした奴だけには絶対に言われなくなかったが
確かに俺も執事服が似合ってるとは到底言えないし、
なにより言い返す気力も無かったのでそのまま黙っていた。

「・・・朔の執事服の似合うに合わないはともかくとして・・・
本題に移りましょう。」

深呼吸をして呼吸を取り戻した俺を一瞥し、咲夜さんは巫女まがいに話しかける。

「わかってるわよ・・・まあ、お茶でも飲んで落ち着きなさい。」

いつの間に取り出したのか知らないが、3人分の湯飲みを取り出した巫女は縁側に腰を下ろす。

「それで・・・今回の異変はどういうことなの？」

・・・異変ってなんだよ？

博麗神社へ（後書き）

ご意見 ご感想お待ちしております。

更新 お知らせのためブログ始めました。

<http://chunibyou-doorblog.jp/>

ほんとに更新報告だけだと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9588u/>

チキン野郎が幻想入り

2011年10月9日07時50分発行